

## 年間第5主日

福音朗読 マタイ 5・13-16

2023.2.5

カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

先日、来客がありまして、お昼ご飯を食べに行こうということで、教会の近くの、築60年の古いお家を改装してレストランとかをやっているお店に入ってみました。ご存じの方もいらっしゃると思います。小さいお店なんですけど、なかなか趣のあるいい場所で、やっぱり本物のお家を使っているというのはいいなあと思います。新しいお店を昔のお家風に造ろうとしてもなかなかああいう趣は出せるものではないなあと感じました。日本では築60年でも古いなあという感じですね。だけど、ヨーロッパとかローマに行けば築100年、200年、300年、あるいはそれ以上という建物を現在でも使っていたり住んでいたりする。バチカンの宮殿なんかもそうですね。あれはもう築400年ぐらいなんじゃないでしょうか。でも、そういう古い建物の中を、むこうは石造りなのでそれが可能なのでしょうが、外観は保ちつつ中の水回りとか空調とかを整えたり、あるいは窓枠なども古いデザインを保ちつつ材質をアルミにしていたりとか、改装して古い建物を使います。ローマで勉強してきた後輩の神父様に聞きましたら、そういうふうに古い建物を今でも住めるように中を改装することを、イタリア語で「アッジョルナメント」と言うそうなんです（アッジョルノ。ボンジョルノのジョルノ。今日<sup>こんにち</sup>的にする、ということです）。

アッジョルナメントと聞いてピンときた方はなかなかの教会マニアですね。アッジョルナメント、日本語で「現代化」と訳されます。第二バチカン公会議、1962年から65年にかけて行われましたけども、時の教皇様の呼びかけで全世界の司教様がバチカンに集まって、教会のいろんなことを話し合い、とり決めた、そういう大きな出来事がありました。そのテーマが教会のアッジョルナメント、現代化でした。一番目立つところでは、例えば、ミサのやり方がラテン語からそれぞれの国の言葉になったりとか、あるいは、多宗派や他宗教への態度が変わったとか、そういうことで、古い方はいろいろ印象深く覚えていらっしゃるのではないかなあと思います。

ところが、この第二バチカン公会議の教会のアッジョルナメント、現代化の精神を日本の教会において実践していく段になると、教会全体というよりは、個々の現場での実践のレベルでということですが、アッジョルナメントという言葉

のニュアンス、すなわち、古い建物の全体は維持しつつ中を住み易いように改装していくというニュアンスを汲み取ることなく行われてきたという面もあるんじゃないかなと思います。日本では立て直しと言えば、木造ですから、あるいは木造じゃなくたって、古いものは全部壊して、そのあとに新しいものを建てるのが一般的ですので、アッジョルナメントという言葉を使った教皇様のニュアンスみたいなことが完全には理解されてなくて、もう古いものは、もう今までの教会は終わりました、みたいな、そういうような形で新しくする、今まで大切にしてきたものは全部、マリア様とか秘跡とか典礼とか聖人とか、そういうのは端に押しやってしまっただけで他教派のキリスト教会のようになることがカトリック教会の現代化なんだっていうような考え方がどこかにあった、そういうような実践もあったというようなことは否定できないんじゃないかなあとと思います。

一方で、そういうふうにしながらか、他教派のように、聖書を徹底的に学ぶのか、日曜日の「聖書と典礼」じゃないですね、皆さんそれぞれの聖書を持って来て、説教はカトリック教会だったら10分も話せば「長いなあ」とみんなぶつぶつ文句を言いますが、10分で終わったら「先生、ちゃんとやってください」（笑）と、最低でも40分、ちゃんと聖書の朗読についての学びがあって、一所懸命勉強する、っていうことはなく、一方で、典礼とか秘跡とか聖人のことを学ぶとか、今まで大切にしてきたことは端に押しやる。となれば、そういう教会は「もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである」（マタイ5・13）というようなことになってしまうんじゃないかなあと、つまりは、自分自身の特徴というものをかなぐり捨てるとするか、何者か他の者になろうとして、何者でもなくなってしまうと、そういうようなことがあるんじゃないかなあとと思います。

じゃ、何にも変えちゃいけない、昔のほうがいいんだという意味ではなく、今まで大切にしてきたことの中にある本質を見極めて、それを現代でも通じるようにアレンジしていく、あるいはそこに新たな意味を与えていくということが大切なのではないかなあとと思います。そうすることによって、人類あるいは社会に対してカトリック教会だからできる貢献というものを見出すことができる。誰か他の人たちのようにと物まねしようとしたところに、わたしたちが特徴を捨ててしまうところに、良いことはないんだと思います。

これは長い前置きなんですけど、このことは個人についてこそ言える。教会についてはいろんな意見がありますから、多分にわたくしの独断的な見解かもしれませんが、個人については絶対これは言えることですね。人が成長すると

か、信仰に生きるとかいうのは、自分ではない別人になる、あるいは他の人のようにする、ということでは決してないということです。「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。」  
(マタイ 5・13)

塩は保存とか料理とかに役に立ちます。でも一方で困ったことを引き起こすことも事実です。物が錆びたり、農作物の害になったり、採り過ぎれば高血圧とか腎臓とか、そういう病気の原因になったり。だけど、塩自身がそのことを気にして、塩は気にはしませんけども、たとえて、塩が気にして、そういう害を引き起こさないようにということばかりを考えれば、塩味とか保存とかの役にも立たなくなってしまうわけですね。

わたしたちもおんなじように、自分自身を他の人みたいにしなきゃ、他の人のように、というようなところで、自分自身の思いとか大切にしていることとかをないがしろにしたところに、一人ひとりが生きる意味を捨てていってしまうこともあります。わたしたちが、自分の性質を知り、それを受け入れて大切にしていこうとするときに、自由な心で他の人とも接する、愛するということが出来るようになるのではないか。信仰というものは、何か強制ではない。そして、愛するっていうのも言われてすることではない。自由な心からでなければ、それは神様の前に喜ばれる愛にはならない、ということです。

父である神様は一人ひとりをご自分に似せてお造りになった、とわたくしたちは信じております。一人ひとりの中に、その人だからこそ照らせる闇がある、そういう光を与えられている、と信じます。だから今日、イエス様は「あなたがたの中の光が輝け！」と言っています。「輝かしなさい」(マタイ 5・16) って、何か努力してしなさいっていうのは翻訳上のちょっと変なニュアンスで、むしろ光に対してイエス様は言ってるんです。「あなたがたの中の光が輝け！」っておっしゃっている。そういうイエス様の願いですね。

だから、わたしたちは、他の人たちがどうだからとか、他の人のようにしなきゃとか、そういうことではない。自分自身の大切に思うことを生きる、あるいは、そのことを隠さない、ということを通して、わたしたちをお造りになった神様の呼び掛けに応えていくことができるのではないかなと思います。だから、わたしたちをお呼びになったイエス様に、「このわたしと何がやりたくてお呼びになったんですか」と信頼をもってお尋ねすればよいのではないかなと思います。

他の人のふりをしてではなく、神様に造られた自分自身を受け入れて、自分自身として生きるために、対話のうちにイエス様を今日もご聖体を通してお迎え

したい。自分自身を生きていく、その決断と、そして信頼のうちにイエス様との対話を続けて行きたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>